

資料

「五種限定統制」移行期の旧制中学校「国語読本」総目次(2)

武\*  
藤 清 吾

四 岩波編輯部編『国語』改訂版

1 改訂全体の特徴

岩波編輯部編『国語』は、一九三五（昭和一〇）年から使用された「国語」教科書のなかで最も採択率の高かった教科書である。一九三七年<sup>1</sup>度には、四〇八校、三八年度には六一七校で使用されたと『国語 特報』で報告されている。

西尾実を中心とした編輯部は、一九三七年の中学校教授要目中改正にあわせて『国語』を改訂する。『国語』に収められた二四篇の教材を削除し、二七篇の教材を新たに加えている。このほか、各課の余白に入れられた漢文、古文の短文五篇も削除された。本稿ではこれらを便宜上「添え文」と呼んでおく。この添え文は正課ではない。したがって正課としては三篇増えたことになる。ただし、巻五の二〇課「詩二篇 風」（島木赤彦）は削除されたが、同じ課の「風」（北原白秋）は巻三の一八課に残されているので、実質的には二篇の増加である。この収録数から判断すると、改訂後も収録数を大きく変更する考えがなかったと推測される。

2 削除された教材と新教材

改訂された教材は、改訂教材一覧として後掲した。この一覧からまず気づかされるのは、三五年版をもとに教材の適切な配当を心がけていることである。特に三五年版に多かった随筆と紀行を減らし、説明文や評論を増やしている。具体的には、島木赤彦の随筆と詩の二篇が削除された。島木赤彦は、三五年版では六篇が収録されており、夏目漱石、島崎藤村に並んでいた。収録数の多い背景には、編者の西尾実が赤彦と同郷で交流もあつたことがあるが、全体の構成から考えて収録数を減らしたものとと思われる。また、徳富蘆花の『自然と人生』から採られた随筆のうち、巻二の三課「自然に対する五分時」「相模灘の落日」の二篇が削除されて「大海の日出」のみが残されている。

これらに代わり、巻一の九課「松」（長与善郎）、巻二の一七課「水」（ラスキン・沢村寅二郎訳）が加えられた。「松」は白樺派の作家による随筆で松の生長と人間的成長とが重ねて論じられている。「水」はイギリスの思想家ラスキンの随筆で、水の持っている自然美が主題となつてい

\* 広島経済大学経済学部教授

る。このほか、報告文として、巻二の四課「鶏の声」(伊藤左千夫)が収められている。洪水から避難した翌朝、鶏の声に生命を実感するというルポルタージュである。説明文として、囲炉裏の火を囲む人間教育を述べた巻六の三課「炉の火」(柳田国男)が興味深い。

評論では、巻六の六課「機」(佐藤春夫)が鷗外の詩を論じている。特に、巻八に評論が並んだ点に特徴がある。生活の芸術としての俳句を論じている五課「生活の芸術」(大須賀乙字)、伝統的な演劇の特質を情調、象徴などの側面から論じている八課「能楽の特質」(戸川秋骨)、日本の国土・国民を支配することを古来から「うしはく」「知らず」と呼んできた語意を述べている一五課「言霊」(井上毅)、フランスの彫刻家ロダンの彫刻芸術の真実を語る言葉を高村光太郎が翻訳した一七課「彫刻と自然」(ロダン)が収められた。俳句、能楽、言語、彫刻という文化論を学ぶことで、中学生の認識が生活から芸術へと広がることが期待されている。

詩では、巻七の五課「望郷五月歌」(佐藤春夫)が加えられた。韻律を複雑に組み合わせて五月の自然と人事を詠んでいる詩である。

紀行が四篇収録されていた巻五から一一課「山上の霊気」(松本亦太郎)、一八課「仏法僧」(高浜虚子)が削除され、巻四の七課「巡礼日記」(愚庵)が入れられた。愚庵は正岡子規の作風に影響を与えたことで知られる。「巡礼日記」は、維新の混乱で生き別れた父母、妹の冥福を祈る旅の記録である。巻五には、一〇課「線香花火」(吉村冬彦)が新たに加えられた。「線香花火」は科学的な目で線香花火を観察した随筆である。

伝記では、巻四の八課「將軍吉宗」(菊池寛)を削除して、巻二の一一課「宮本武蔵」(武者小路実篤)に変更している。「宮本武蔵」は武蔵と小次郎との戦いを描いている。古典の収録と同じく、武士道にかかわる

文章が増えている。

戯曲では、巻二の二六課「勿来の関」(岡本綺堂)を同巻の二〇課「桜井駅」(真山青果)と入れ替えている。「勿来の関」が安倍宗任と源義家の別離を描いたのに対して、「桜井駅」は楠木正成親子の別離を描く。

「桜井駅」を素材にしたものは、他の「国語」教科書に収められた松居松翁の作品などもあるが、それを採らずに『キング』(一九三四・六)所収の「楠公桜井駅」を抄録している点が特徴である。

三五年版で芭蕉に関する教材を多数収めたのは「国語」の大きな特徴であった。改訂版では、巻八の七課「蕉風」(藤岡作太郎)、巻六の六課「芭蕉の臨終」(花屋日記)の二篇が削除された。芭蕉論までは収めずに芭蕉の作品そのものの鑑賞と批評に学習指導の重点が置かれている。

アジア・太平洋戦争下で検閲許可されなかったと推測される教材は削除されている。小説では、中勘助『銀の匙』から採られた巻一の七課「夕がたの遊」、巻三の五課「山の手の家」がある。『銀の匙』後篇の二に日本は中国との戦争に負けるという趣旨の記述があり、これが削除の背景であろうと推測される。ただし、中勘助はその後戦争詩などを書いてはいる。中勘助の代わりに巻四の一六課「北国空」(泉鏡花)、巻五の一八課「兄弟」(山本有三)の二篇の小説が加えられた。「北国空」は雪深い北国での生活を描いた話、「兄弟」は初茸採りに山に入った兄弟が番人の爺さんに叱られる話である。

東郷平八郎が米国大統領ルーズベルト邸を訪問した報告文、巻二の一七課「両雄の会見」(小笠原長生)、ドイツ生まれのユダヤ人であったアインシュタインの評伝、巻六の一課「アインシュタイン」(吉村冬彦)、パリ凱旋門に刻まれたフランスの彫刻家リュードの「進軍」を描いた巻八の一五課「進軍」(八代幸雄)の三篇も敵対国の文化や人物を賛美した

教材、軍事同盟国における差別を結果的に批判する教材である。卷三の一二課「東郷元帥と乃木大将」(安倍能成)が「両雄の会見」の代わりに入れられたと思われる。

ロックフェラー医学研究所などで研究成果を上げた野口英世の父宛ての書簡、卷三の一二課「恩師へ」(野口英世)が削除された。アメリカの研究機関で働いたことが問題になるという判断かと思われたが、卷一の二四課「野口博士の少年時代」という伝記が残されていることから考えると、国策や政治的な意味合いを持つ教材は削除することになったであろう。イギリスの思想家ラスキン、フランスの彫刻家ダンテの文章は翻訳として収められていることも同じ考え方であつたろう。

また、詩では、働くことの幸福を謳った卷二の七課「快晴」(河井醉茗)を削除して、三里塚御料牧場を詠んだ卷三の四課「春駒」(高村光太郎)を入れている。光太郎は多くの戦争協力詩を書いた。

評論では、卷二の二三課「国史に還れ」(徳富蘇峰)が削除されて説明文が二篇加えられている。国歌「君が代」が宮中の雅楽師によって作曲された由来を説く卷二の二二課「国歌」(田辺尚雄)、日本人の強さは皇室へのまごころにあるとする皇室賛美論、卷二の二二課「国民のまごころ」(芳賀矢一)は、蘇峰の概念的な評論よりも読みやすく、尊皇思想をより具体的に理解させようという意図が感じられる。一方で、卷一の二五課「国旗」は削除されて、吉村冬彦の随筆「科学的日本魂」が入れられていることは注目してよい。

勤皇の牧畜家と乃木將軍の交流を描いた卷一の二〇課「愛馬」(桜井忠温)、首相官邸前の大樹を讀えた卷四の三課「庭前の榎の樹」(浜口雄幸)は削除された。これらの随筆は、尊皇思想と人的交流、自然讃歌の二側面を持っており、学習指導の過程で主題のとらえにくさが指摘された可

能性もある。

こうした変更の影響は、特に卷二と卷八に目立って現れている。卷二では多様な文種の教材が収められることになり、卷八では評論が多くなっている。

### 3 本文差し替えまたは表題変更の教材(同一筆者)

随筆では、卷一の九課「蜂の巣」(吉村冬彦)から、地図作成の科学的態度を論じた卷一の二五課「科学的日本魂」に差し替えられた。また、卷八の三課「中宮寺の観音」(和辻哲郎)という紀行文が同じ筆者の「城」に変更されている。高層建築と城を対比的に論じている説明文である。ともに情緒的な文章から科学的な文章に変更されていることは注目してよい。

卷二の二〇課「庭の黒土」(相馬御風)は同じく卷二の一九課「雪国の春」と表題を変更している。この表題のほうが越後出身の御風の童謡「春よ来い」(『金の鳥』一九二三・三)を連想させる。

評論では、重要な差し替えが行われた。卷五の二三課「ツエッペリン伯号を迎へて」を「日本の魔法鏡」に入れ替えている。「ツエッペリン伯号を迎へて」も「日本の魔法鏡」も、ともに西尾自身の文章である。

「ツエッペリン伯号を迎へて」は、すでに考察したように、日本とドイツ両国の国威発揚のイメージの強い文章であった。西尾は自ら編集した教科書に載せた自らの文章が国家主義的な観点から読まれやすい傾向にあるのを危惧したのであろう。自己鍛錬と現代科学との結合による日本文化の創造を主題にした文章に置き換えたのである。

#### 4 収録巻が変更された教材

収録巻が変更された教材は、三五年版の指導経験を踏まえ、よりふさわしい学年に配当されたと考えられる。全体としては上級学年に配当されていた教材を下級学年にしている場合が多い。

#### 5 古典教材

古典も文章の幅を広げる工夫がなされていることに気づく。

古文では、「方丈記」を出典とする巻七の二三課「ゆく川の流」（鴨長明）が削除され、「枕草子」から二三課「桃の木」（清少納言）が入られた。また、巻九の二三課「法成寺の造営」（栄華物語）が削除され、同じく巻九の一九課「念仏と愛語」（親鸞・道元）が入られた。「念仏と愛語」は「歎異抄」と「正法眼蔵」から信仰の意味を説く文章を抄録したものである。

近古では、巻一の二三課「かんにん」（柳沢淇園）と巻三の一九課「霧島山」（橘南谿）が削除された。ともに同一著者の作品を複数採録しており、武士道と国学を主題とした他の著者による文章と入れ替えている。幕末勤皇の藩士が武士道を説く巻一の二三課「立志」（橋本左内）、武士道による家庭教育論である巻三の二三課「妹に与ふ」（吉田松陰）、少年時代の苦難を懐古する巻三の二三課「天下第一人」（渡辺崋山）、国学入門である巻五の二三課「うひ山ふみ」（本居宣長）を収めている。近古の文章が増えていることが戦争国策の影響かどうかは検討を要する。

以上が岩波編輯部編『国語』が一九三七年に改訂された際の概要である。本稿では、資料を掲出するにあたっての概観にとどめた。詳細な考察は別稿で行う予定である。

#### 注

- (1) 「編集室と教室との連絡機関」という位置づけで、現場での学習指導を進める補助資料として発行された。  
 (2) 拙著「芥川龍之介編『近代日本文芸読本』と『国語』教科書 教養実践の軌跡」 汲水社、二〇一一年二月二五日、四〇〇～四〇一頁、四一〇頁

付記 本研究は、広島経済大学特定個人研究費（二〇一〇年度）の助成を受けた研究成果の一部である。

#### 【改訂教材一覧】

##### 1 削除された教材

小説	巻一	七課「夕がたの遊」（中勘助）
随筆	巻一	二〇課「愛馬」（桜井忠温）
	巻二	三課「自然に対する五分時」「相模灘の落日」（徳富蘆花）
	巻三	四課「おたまじゃくし」（島本赤彦）
	巻四	三課「庭前の榎の樹」（浜口雄幸）
	巻八	一五課「進軍」（八代幸雄）
紀行	巻五	一一課「山上の靈気」（松本亦太郎）
	巻五	一八課「仏法僧」（高浜虚子）
説明	巻一	二五課「国旗」
評論	巻二	二二課「国史に還れ」（徳富蘇峰）
評伝	巻六	一一課「アインシュタイン」（吉村冬彦）
	巻八	七課「蕉風」（藤岡作太郎）
伝記	巻四	八課「将軍吉宗」（菊池寛）

報告	卷二	一七課「両雄の会見」(小笠原長生)
書簡	卷三	一二課「恩師へ」(野口英世)
詩	卷二	七課「快晴」(河井醉茗)
	卷五	二〇課「詩二篇 風」(島本赤彦)
戯曲	卷二	一六課「勿来の関」(岡本綺堂)
古文	卷六	六課「芭蕉の臨終」(花屋日記)
	卷七	一三課「ゆく川の流」(鴨長明)
	卷九	一三課「法成寺の造営」(栄華物語)
	卷二	添え文「宝祚無窮」
近古	卷一	二二課「かんにん」(柳沢淇園)
	卷三	一九課「霧島山」(橘南谿)
漢文	卷一	添え文「金言」「人」「実語教」
	卷二	添え文「白石朋ヲ薦ム」(原善)
<b>2 新教材</b>		
小説	卷四	一六課「北国空」(泉鏡花)
	卷五	一八課「兄弟」(山本有三)
随筆	卷一	九課「松」(長与善郎)
	卷二	一七課「水」(ラスキン・沢村寅二郎訳)
	卷五	一〇課「線香花火」(吉村冬彦)
説明	卷二	二二課「国歌」(田辺尚雄)
	卷二	二二課「国民のまごころ」(芳賀矢一)
	卷六	三課「炬の火」(柳田国男)
報告	卷二	四課「鶏の声」(伊藤左千夫)
評論	卷六	六課「機」(佐藤春夫)
	卷八	五課「生活の芸術」(大須賀乙字)
	卷八	八課「能楽の特質」(戸川秋骨)
	卷八	一五課「言霊」(井上毅)
	卷八	一七課「彫刻と自然」(ロダン・高村光太郎訳)
	卷四	七課「巡礼日記」(愚庵)
日記	卷二	一課「宮本武蔵」(武者小路実篤)
伝記	卷三	一二課「東郷元帥と乃木大将」(安倍能成)
戯曲	卷二	二〇課「桜井駅」(真山青果)
詩	卷三	四課「春駒」(高村光太郎)
	卷七	五課「望郷五月歌」(佐藤春夫)
川柳	卷七	二〇課「川柳点」
古文	卷七	一三課「桃の木」(清少納言)
	卷九	一九課「念仏と愛語」(親鸞・道元)
近古	卷一	二三課「立志」(橋本左内)
	卷三	一三課「妹に与ふ」(吉田松陰)
	卷三	二三課「天下第一人」(渡辺崋山)
	卷五	二二課「うひ山ふみ」(本居宣長)
<b>3 本文差し替えまたは表題変更の教材(同一筆者または出典)</b>		
随筆	卷一	九課「蜂の巣」(吉村冬彦) ↓ 卷一 二五課「科学的日本魂」
	卷二	二〇課「庭の黒土」(相馬御風) ↓ 卷二 一九課「雪国の春」に改題
伝記	卷二	一八課「人間エディソン」(澤田謙) ↓ 卷二 一六課「人間エヂソン」に改題

評論 巻五 二三課「ツェッペリン伯号を迎へて」→「日本の魔法鏡」

紀行 巻六 一六課「檜原峠越」(大島亮吉)→「足跡」に改題

巻八 三課「中宮寺の観音」(和辻哲郎)→「城」

和歌 巻七 六課「水の音」(西行・源実朝)→巻七 三課「松風」に改題

古文 巻五 五課「熊野落」(太平記)→「村上義光」

巻七 九課「福原落」(平家物語)→「平家の都落」

巻九 一二課「道長の幼時」(大鏡)→「菅原のおとぎ」

#### 4 収録巻が変更された教材

小説 巻二 二二課「犬ころ」(長谷川二葉亭)→巻一 一八課「ボチ」

チ

随筆 巻二 一一課「カルサンと米」(島木赤彦)→巻一 二〇課「かるさんと米」

巻五 四課「春三題」(吉村冬彦)→巻三 三課

#### 5 同一巻内での課の入れ替え教材

小説 巻一〇 一一課「五重塔」(幸田露伴)→一二課

巻一〇 一二課「塩原」(尾崎紅葉)→一一課

評論 巻一〇 一八課「愚禿親鸞」(西田幾多郎)→一九課

巻一〇 一九課「国文学の精神」(久松潜一)→一八課

巻七 二二課「龍安寺の庭」(萩原井泉水)→巻八 一九課

評伝 巻八 一〇課「象山と松陰」(徳富蘇峰)→巻七 一七課

詩 巻三 二課「潮の音」(島崎藤村)→巻四 二三課

巻五 二〇課「詩二篇 風」(北原白秋)→巻三 一八課

巻七 二〇課「斑鳩宮」(三木露風)→巻五 一二課

古文 巻七 二二課「月の兎」(良寛)→巻六 九課

歌謡 巻八 一七課「舞へ舞へ蝸牛」(梁塵秘抄)→巻七 六課

近古 巻四 六課「青木新兵衛」(室鳩巢)→巻三 八課

近古 巻八 一九課「人道」(二宮翁夜話)→巻六 一一課

表4 岩波編輯部編『国語』改訂版 総目次  
一九三七(昭和一二)年七月四日発行 一九三七(昭和一二)年二月一八日訂正再版発行 岩波書店

巻一			巻二		
一	随筆	生きた言葉	一	詩	日本
二	随筆	桜	二	随筆	明治神宮
三	小説	曙の富士	三	随筆	大海の日出
四	短歌	明治天皇御製	四	報告	鶏の声
五	説明	春の使者	五	紀行	小春の岡
六	小説	峠の茶屋	六	随筆	落葉
					島崎藤村
					四六



七	詩	詩二篇	生長	千家元麿	三六	七	説明	渡り鳥	松本亦太郎	五二
八	紀行	山寺	海	若山牧水	三七	八	隨筆	潮待つ間	幸田露伴	六二
九	隨筆	松		長与善郎	三八	九	近古	親心	柳沢淇園	六五
一〇	報告	八丈島行幸		藤原咲平	四七	一〇	近古	父の物語	新井白石	七〇
一一	童話	蜘蛛の糸		芥川龍之介	五一	一一	伝記	宮本武蔵	武者小路実篤	七四
一二	小説	屋根		志賀直哉	五七	一二	紀行	武蔵野日記	国木田独步	八六
一三	隨筆	水泳		飯田蛇笏	六九	一三	短歌	冬山	前田夕暮	九二
一四	紀行	葎と茱萸		正岡子規	七二				若山牧水	
一五	紀行	上高地		田部重治	七七	一四	小説	トロッコ	芥川龍之介	九六
一六	説明	空の色		岡田武松	八七	一五	小説	吹雪	村井弦斎	一〇四
一七	隨筆	湖畔 霧道		杉村楚人冠	九九	一六	伝記	人間エヂソン	ラスキン	一二四
一八	小説	ボチ		長谷川二葉亭	一〇五	一七	隨筆	水	沢村寅二郎訳	一三七
一九	伝記	良寛さま		北原白秋	一一一				橘南谿	
二〇	隨筆	かるさんと米		島木赤彦	一二二	一八	説明	蜃気楼	相馬御風	一四四
二一	近古	用水		遭老物語	一二七	一九	隨筆	雪国の春	真山青果	一五〇
二二	近古	藤樹先生		橋本左内	一三五	二〇	戯曲	桜井駅	田辺尚雄	一五五
二三	近古	立志		野口英世	一四〇	二一	説明	国歌	芳賀矢一	一七二
二四	伝記	野口博士の少年時代		吉村冬彦	一四八	二二	説明	国民のまごころ		一七九
二五	説明	科学的日本魂			一五三					
					一七二					
一	隨筆	大和言葉		五十嵐力	一	一	小説	初旅	島崎藤村	一
二	紀行	島四国		荻原井泉水	六	二	短歌	あづさの紅葉	伊藤左千夫 長塚節	一〇
三	隨筆	春三題		吉村冬彦	一四	三	隨筆	暁鐘	島木赤彦 斎藤茂吉	一四
四	詩	春駒		高村光太郎	二〇	四	隨筆	師の言葉	武者小路実篤	一八
五	隨筆	雨		山口青邨	二二	五	近古	板倉父子	新井白石	二三
六	紀行	千本松原		伊藤左千夫	二八				板倉勝重	二七
七	近古	天徳寺了伯		湯浅常山	三七				板倉重宗	二七
八	近古	青木新兵衛		室鳩巢	四〇				高浜虚子	三一
九	近古	伊達政宗		新井白石	四四	六	小説	柿二つ		

<p>一〇 説明 輿国の樞 一一 報告 日本海海戦 一二 伝記 東郷元帥と乃木大将 一三 近古 妹に与ふ 一四 報告 心の小径 一五 小説 焚火 一六 紀行 金華山 一七 随筆 雜草 一八 詩 風 一九 説明 昆虫の本能 二〇 短歌 石をきざむ 二一 随筆 鴉勸請 二二 説明 学者の苦心 二三 近古 天下第一人</p> <p>内村鑑三 (官報) 安倍能成 吉田松陰 金田一京助 志賀直哉 長塚節 斎藤茂吉 北原白秋 フアーブル 窪田空穂 木下利玄 柳田国男 芳賀矢一 渡辺崋山</p> <p>四九 六五 七八 八八 九二 一〇六 一二二 一三一 一三六 一三九 一五四 一五八 一六四 一七〇</p>	<p>七 日記 巡礼日記 八 俳句 夜長 九 随筆 風 一〇 随筆 遠望 一一 小品 文鳥 一二 戯曲 夜叉王 一三 近古 誠 一四 近古 惜陰 一五 紀行 湖畔の冬 一六 小説 北国空 一七 随筆 銀線を描く 一八 近古 創始者の苦心 一九 伝記 二宮尊徳の幼時 二〇 随筆 西郷の一言 二一 評論 天 二二 小説 厨子王 二三 詩 潮の音 二四 随筆 神国首都</p> <p>愚庵 正岡子規 徳富蘆花 吉江喬松 夏目漱石 岡本綺堂 三浦梅園 貝原益軒 島木赤彦 泉鏡花 浦松佐美太郎 杉田玄白 富田高慶 勝海舟 西郷隆盛 森鷗外 島崎藤村 小泉八雲</p> <p>四〇 五二 五四 五九 六六 七四 八八 九四 九八 一〇〇 一二〇 一三二 一三九 一四九 一五四 一五八 一七四 一七六</p>
<p>一 評論 道 二 古文 道を知れる者 三 随筆 極東に於ける第一日 四 紀行 吉野の奥 五 古文 村上義光 六 古文 正行の参内 七 古文 熊王の発心 八 和歌 国上山 九 随筆 墨汁一滴 一〇 随筆 線香花火 一一 小説 非凡なる凡人 一二 詩 斑鳩宮</p> <p>芳賀矢一 吉田兼好 小泉八雲 吉田絃二郎 (太平記) (太平記) (吉野拾遺) 平賀源内 正岡子規 吉村冬彦 国木独歩 三木露風</p> <p>一 九 一二 一九 二九 三六 四一 四六 五〇 五四 六一 八二</p>	<p>一 随筆 秋 二 詩 神ほぎ 三 説明 炉の火 四 評論 松下村塾 五 小説 天寵 六 評論 機 七 近古 不動智 八 俳句 雑煮 九 古文 月の兎 一〇 古文 芸能逸話 一一 近古 人道 一二 評論 労働</p> <p>綱島梁川 蒲原有明 柳田国男 徳富蘇峰 森鷗外 佐藤春夫 沢庵 与謝蕪村 良寛 (古今著聞集) (二宮翁夜話) 内村鑑三</p> <p>一 四 七 一五 二五 四三 五八 六二 六四 六六 七二 七八</p>

巻五

巻六



一 傳記 乃木大将の殉死	一 隨筆 結晶の力	一 隨筆 島崎藤村	一 評論 都市美論	一 隨筆 佐藤功一	一 傳記 小泉信三
二 古文 故郷の花	二 評論 歌の響	二 島木赤彦	二 紀行 巴里通信	二 島崎藤村	二 厨川白村
三 古文 小枝の笛	三 和歌 松風	三 西行	三 說明 城	三 和辻哲郎	三 和辻哲郎
四 古文 扇の的	四 評論 萬物の声と詩人	四 源実朝	四 小説 東洋の詩境	四 夏目漱石	四 夏目漱石
五 歌謡 舞へ舞へ蝸牛	五 詩 望郷五月歌	五 北村透谷	五 評論 生活の芸術	五 大須賀乙字	五 大須賀乙字
六 近古 源氏物語論	六 歌謡 舞へ舞へ蝸牛	六 佐藤春夫	六 古文 奥の細道	六 松尾芭蕉	六 松尾芭蕉
七 近古 平重盛	七 近古 源氏物語論	七 本居宣長	七 俳句 陽炎	七 松尾芭蕉	七 松尾芭蕉
八 古文 平家物語	八 古文 平家物語	八 芥川龍之介	八 評論 能楽の特質	八 戸川秋骨	八 戸川秋骨
九 古文 平家物語	九 古文 平家物語	九 森鷗外	九 戯曲 鉢の木	九 坪内逍遙	九 坪内逍遙
一〇 小説 戲作三昧	一〇 小説 戲作三昧	一〇 芥川龍之介	一〇 戯曲 長柄堤の決別	一〇 北畠親房	一〇 北畠親房
一一 小説 寒山拾得	一一 小説 寒山拾得	一一 森鷗外	一一 古文 人臣の道	一一 安倍能成	一一 安倍能成
一二 評論 隨筆の説	一二 評論 隨筆の説	一二 五十嵐力	一二 評論 哲人の養成	一二 阿部次郎	一二 阿部次郎
一三 古文 桃の木	一三 古文 桃の木	一三 清少納言	一三 評論 浄火(翻訳)	一三 茅野蕭々	一三 茅野蕭々
一四 古文 法師の話	一四 古文 法師の話	一四 吉田兼好	一四 評論 人間ゲーテ	一四 井上毅	一四 井上毅
一五 近古 学問	一五 近古 学問	一五 松平定信	一五 評論 言霊	一五 五十嵐力	一五 五十嵐力
一六 近古 雅文四篇	一六 近古 雅文四篇	一六 橘千蔭	一六 評論 彫刻と自然	一六 高村光太郎	一六 高村光太郎
一七 近古 隅田川の雨	一七 近古 隅田川の雨	一七 村田春海	一七 評論 茶の宗匠	一七 岡倉覚三	一七 岡倉覚三
一八 近古 曇る夜の月	一八 近古 曇る夜の月	一八 村田春海	一八 評論 茶の宗匠	一八 岡倉覚三	一八 岡倉覚三

[illegible]

二〇	古文	日野の閑居	鴨長明	一四六
二一	古文	只今の一念	吉田兼好	一五六
二二	謡曲	隅田川	(宝生流正本)	一六四
二三	評論	能面の表情	野上豊一郎	一七八
二〇	評論	生涯稽古		一六三